

デカイ隣人がストーカー化して怖いので引越そうとしたら、  
監禁レイプで処女まんこをぐちゃどろにして中出しされる話

サンプル（一部抜粋）

「…え？」

見慣れない天井。壁一面に貼られた私の写真。目の前には身体の大きな筋肉質な巨体。

「…っ」

慌てて手を動かそうとしたけれど、響いたのは冷たい金属がぶつかる音。

「…やっと二人きりですね。」

異様な空間と、それに見合わないほど爽やかに嬉しそうに微笑む目の前の男。

「ひ…たすけ…」

「無駄ですよ。何もかも無駄。」

大きな手が伸びてくる…

誰か助けて。あと少しで自由を手に入れられたはずなのに…どうして…？

「4カ月前」

「はあ：今日も疲れた：」

いつもと変わらない一日。社会人一年目の私は、業務内容で頭がパンクしそうで、かなり限界だった。

毎日ため息をつきながら帰宅する。それが：私の日常だった。

「ふう：」

鍵を開けて部屋に入り、靴を脱ぎ、スーツをハンガーにかける。

でもその時、ピンポンとインターホンが鳴った。

何か頼んだっけ？モニターで外を確認すると、そこにはガタイのいい男性が立っていた。

時間は夜の8時。こんな時間に誰…？

そう思いながらもインターホンの通話のボタンを押す。

「はい？」

「あ、隣に引越してきた天童です。」

あ、なんだ。引越しの挨拶に来てくれたのか。ガタイの良い人だったから、ちょっと警戒しちゃった…。

「すぐ開けますね！」

私は明るくそう返して、すぐに玄関に向かった。  
がちやつと鍵を外す。それが地獄に続く扉だとも知らずに。

扉を開けて一番に目に飛び込んできたのは、厚すぎる胸板だった。

呼吸に合わせてわずかに動く胸板。わずかに香る柔軟剤の匂い。視線をゆっくり上に上げると、整った顔が目に入る。

ただ：あまり目に光がないように見えて、どこか少し怖い印象だった。

「：天童です。これ、つまらないモノですが：。」

低い声。にこつと爽やかに笑った顔は、良い人そうな印象。：なのに、なぜか背筋がぞくりと震えた。本能が『関わるな』と叫んでいるような、説明のつかない違和感。

夜だから一瞬怖く見えたただけだね。私は必死に、自分の中のそんな失礼な予感を、無理やり消し去った。

「あ：高梨です：。」

と軽く挨拶をかわし、差し出された小さな手土産を受け取る。

「今後ともよろしくお願いしますね。」

「こちらこそ：よろしくお願いします。」

軽く頭を下げる。

天童さんは笑顔のままふわっと甘い匂いを残し、帰っていった。これが…私と天童さんの出会いだった。

翌朝、いつも通り仕事に行く為に朝6時に家を出る。だけどドアを開いた瞬間、ビクツとした。だって外廊下に天童さんが立っていて、にこっと微笑んでいたから。

「あ、…おはようございます…」

隣人として、軽く挨拶をする。

「おはようございます。詩織さん。」

明るい笑顔で挨拶を返される。その大きな手にはゴミ袋。

あ、ただゴミを捨てようとしただけか。タイムングがピッタリでびっくりしちやった。

軽く会釈だけをして、階段で1階までかけおり、駅に向かう。

…ってあれ？

さっき、『詩織さん』って言われた…？

昨日の挨拶の時、名前まで言ったっけ…？一瞬そう思ったけれど…きつと名前まで言ったんだろう。だって面識のない彼が、名乗ってもいない名前を知っているわけがないんだから。

なんだか…ガタイがいい人だからってちよつと警戒しすぎかな。

(中略)

「…で、詩織さん。」

「はい…？」

逃げようと足早に階段に向かうのに、歩幅の大きな彼にあつという間に追いつかれる。

「昨日、美味しそうでしたね。」

そしていきなり意味の分からない事を言われる。

「え？」

「昨日の夕飯。」

「…？」

「肉じゃがだったでしょう？」

僕、大好きなんですよ。肉じゃが。」

「なんで…肉じゃがって…」

え、言いましたっけ…？」

もし私が料理をするのであれば、換気扇からの匂いでバレたとか予想がつく。でも昨日は違う。

家にストックしていた、温めるだけの肉じゃがを食べたから。

さすがに…隣にまで匂うほどのご飯でもないし…。

どうして知っているのか、毛が逆立つほどの気持ち悪さを覚える。

恐怖を感じながら、チラッと天童さんの顔を見ると、その顔には笑顔は一ミリもなく、冷たく

ねっとりとした光の無い目で私を捉えていた。

「っ…」

「…いやだなあ。詩織さん、昨日言ってたじゃないですか。

家にストックしてる肉じゃがを食べるって。それに美味しそうな匂いがしましたから。」  
でも次の瞬間には爽やかな笑顔に戻る。

頭の中で響く警報が明らかに強くなっていく。本能的に…ヤバいと感じた。

「…そ、そうでしたっけ…」

ぞわぞわとした感覚のまま、刺激しないように軽く会話をかわす。

(中略)

「ほら、詩織さん。分かりますか？

蜜があふれて、クリトリスまでぬるぬるになっていきますね。」

くちゅっ…くちゅっ…と小さな音をたて、ぬるぬると指がクリトリスの上を滑る。

「ひ…あ…ああ…っ、は…っ」

上下に擦られる度にクリトリスがぷっくりと腫れあがってしまう…。

「…詩織さん、気持ちいい？」

声を漏らす私を観察しながら、意地悪な質問を投げかけてくる天童さん。

「気持ちよく…なんて…っ、あ…あ…っ、やだ…そこコリコリしちゃ…やだ…っ」

「…ほら、認めて。」

「いや…っ、あ…」

必死で手錠をジャラジャラと鳴らし、首を横に振る。

「…へえ。」

そんな私を見ながら、クリトリスをさする速度がくちゆくちゆと上がる。

擦り上げられる度にぞくぞくと腰が浮いて、クリトリスの先端が熱くなっていく。

「ああ…あつ、ああ…やだ、なんか…変つ、熱い…やだやだっ…あああ…」

身体の内側から何かに追い詰められていく…。

「…すごいな…。」

クリトリスがもうパンパンに勃起して、指でなぞる度にコリコリ硬くなってる…。」

「ひ…あ…あああ…やだ、も…っ、無理っ…ああああっ！」

突然身体がビクンと縮こまる。手錠の鎖が限界まで伸びて、手首に重い痛みが走り、ジャラつと金属音が響く…。

ドクンドクンと敏感な場所が痙攣を繰り返し、身体が小刻みに痙攣する…。

「…これでも認めないんですか？」

痙攣を繰り返す私を見下ろし、少し首を傾げて目を見つめながら冷たく言葉を投げつけられる。

「…っ、は…あ…あ…っ、気持ちよく…ない…、身体が変なだけ…っ…です…」

必死で首を横に振って、強がる。だって認めてしまったら……この人の檻に落ちてしまった事の証明になる気がしたから。

認めてしまったら、もう……戻れない気がしたから。

「ふーん。愚かですね。」

「……？」

「気持ちいいって認めたら、君を解放してあげようと思ったのに。」

くちゅつと湿った音を鳴らしながら、クリトリスの周りを指の先でなぞりながら、そんな事を言われた。

「……解放……？ほんとに……？」

「本当に。」

「……」

まさかこの状態から解放してもらえるなんて、思ってもみなかった。この重すぎる手錠も、壁に貼られた大量の私の写真も……私を逃がす気なんてないように……見えていたから。

「気持ちいいって言ったら……いいんですか？」

「そうですよ。」

コリつとまたクリトリスを擦りあげられる。

「ひう……は……あ……コリコリやだ……」

「ほら、早く。」

「っ…気持ち…いい…」

「…なんて？」

もっと大きな声で言ってくれないと、聞こえないですよ？」

「気持ちいい…から、早く解放…してっ、あ…あ…っ」

「…いいですよ。」

クスッと笑う天童さん…。

これで終われる。これで戻れる。もうすぐ引越したんだから…もう二度とこの人につかまったりしない…。

天童さんの指が私のクリトリスからゆっくりと離れ、解放してもらえる喜びをかみしめるように私は目を閉じた。

だけど次の瞬間、じゅるって激しい音が響いて、クリトリスに強烈な刺激を感じた。

（歪んだ純愛調教は本編にて）